

五つ子の妊娠・分娩・成長

研究協力者

外 西 寿 彦

田 崎 啓 介

山 内 逸 郎

研究目的：

一般に多胎妊娠は決してまれなものでなく、欧米では Hellin の法則に近い頻度を報告している。これによれば「五つ子」は 4.0000～5.0000 万回に一回の割合で生れると予測されている。

わが国における五つ子以上の出産例は過去 3 例であるが、いずれも流産している。今回、我々は鹿児島市立病院で生れた「五つ子」の全員が無事哺育されたので「五つ子」の妊娠・分娩経過と五つ子の哺育状況についての経験を報告する。

研究方法：

鹿児島市立病院におとずれた妊娠 8 カ月より分娩までの妊娠状況を超音波断層診断、尿中エストリオール値測定、胎児心音の記録と分娩経過および生後 3 カ月までの哺育状況につき研究した。

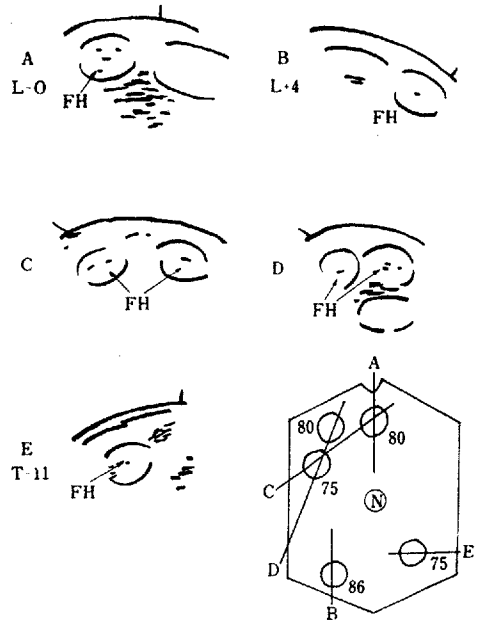
研究結果：

妊娠経過：症例は 27 才の初産婦で家系には多胎をみとめない。昭和 50 年 3 月より 5 月にかけて HMG（更年期婦人尿ゴメドトロピン）62 本と、HCG（人絨毛性ゴメドトロピン）3.000 I. u. 3 A の併用療法を 2 クールうけた。最終月経 5 月 12 日から 5 日間、6 月中旬より下旬にかけて軽度のつわり症をみとめた。7 月 17 日某医にて妊娠と診断され、8 月中旬に児心音を聴取。分娩予定日は 51 年 2 月 19 日とされた。4 カ月末に切道流産の徴候をみとめ 5 日間入院、軽度の貧血で 2 カ月間鉄剤の治療をうけた他は中毒症その他の異常所見はなかつた。しかし、8 カ月に入った頃より、腹部が大きいことより多胎の可能性を指摘されていた。12 月 14 日分娩のため帰省し、翌 15 日鹿児島市立病院を受診した。

外来初診時所見：妊娠 31 週。栄養体格中等度、身長 157 cm、体重 48 kg（妊娠前 40 kg）、腹囲 91 cm、子宮底の高さ 36 cm、腹部の膨隆著明、下腹部に児頭らしき抵抗を触れる他に胎児部分は不明瞭で、胎児心音は下腹部正中線と臍左上方に聴取されたため X 線撮影施行し、3 胎を確認、超音波断層診断にて 4 胎を確認した。その後 1 週ごとの外来検診をおこなったが、腹部膨隆著明のため 1 月 6 日早産予防と胎児管理の目的にて入院。

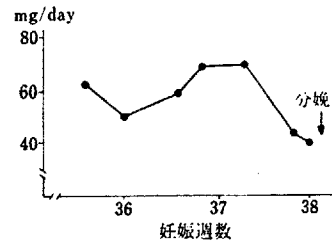
入院後経過：入院後超音波断層による検査は東芝 Sonolayer gropr Ssl-31a を用い、接触コンパウンド走査をしておこなった。この結果図-1のごとく A-E の 5 方向による腹壁走査で 5 胎が確認された。2 子は頭位で他の 3 子は骨盤位であることが判明した。この時点での児頭大横径は 76～78 mm と計測され、初診時における大横径との比較では 7 週の間約 10～20 mm 増大しており、一般に一週で 2.3 mm 以上の増大があれば良好な発育とされている。各胎児の比較は正確には

できなかつたが發育状況を知るうえで有力な情報となりえた。またもつとも先進している頭部の大横径が他の児に比して大きいことは、後続する胎児の分娩が容易であろうと推定された。



1 図

尿中エストリオール値は図-2のごとく多胎妊娠では過剰のエストリオールの排泄がみとめられているとされているが、本例では 68 mg/day であり、38週でも正常域を示していた。胎児心音記録ではトイツ臨床用分娩監視装置 C-200 を用い35週で3胎をキャッチ、Acceleration Pattern をみとめており、子宮内での3胎児の状態は安定しているものと想像された。



2 図 五胎妊娠中の尿中 Estriol (E3)

分娩経過：51年1月31日正午より陣痛発来し子宮口4横開大、胎胞が膈外に膨隆のため、人工破膜をおこない軽度の吸引にて第一子分娩、次いで第二子の胎胞が膨隆し人工破膜を行い頭位分娩、第三子は足位娩出、第四子も足位娩出、第五子は足位で卵膜をかぶつたまゝ娩出。仮死は第二、第

三子にみとめた。第一子～第五子の娩出所要時間は9分間であつた。出生直後の五児の所見は表-1のごとくである。体重と妊娠週数から第一～第五子は全てSFDと判定された。

胎盤所見：胎盤は2個よりなり、大きい方は650g, 20.5×30×2cm, 小さい方は550g 28×13.5×1.5cmであり、大きい胎盤には3本の臍帯と3枚の卵膜がそれぞれ別個に付着。小さい胎盤には2本の臍帯と2枚の卵膜が付着。各卵膜とも一層の羊膜とトロホプラストがフィブリン硝子様変性した組織を含む絨毛膜よりなり、5羊膜性5絨毛性胎盤とみとめられ、組織学的には5卵性5胎の可能性が考えられた。血液型は5児ともA型RH D+であつた。

哺育状況：生後の栄養法としては5%糖液のあと生後1～2日目より、全児とも母乳による鼻腔栄養を約2カ月間おこなつた。5児の出生後の経過については図3～7のごとくまとめられた。

図3 1子(福太郎)

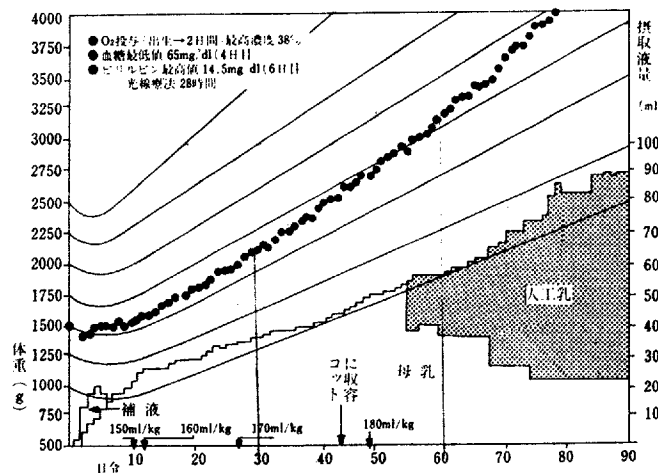


図4 2子(寿子)

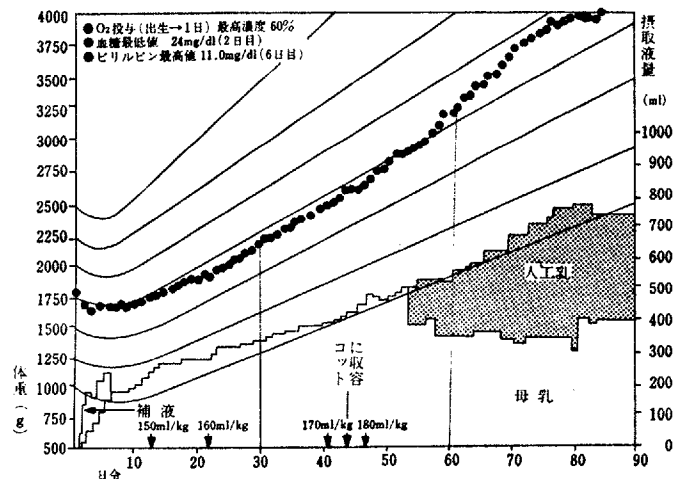


図5 3子(洋平)

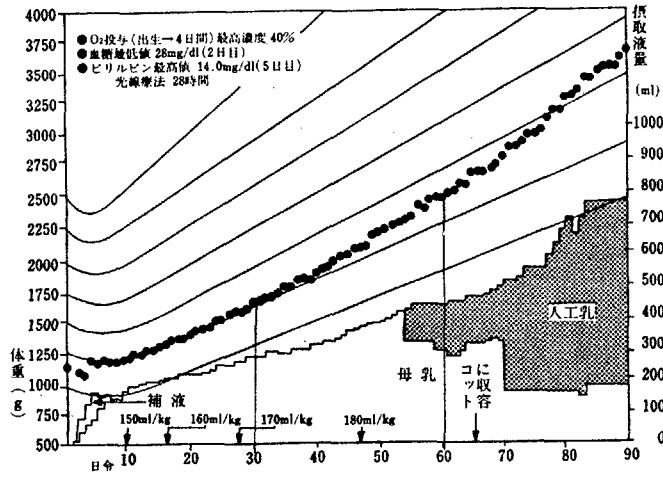


図6 4子(妙子)

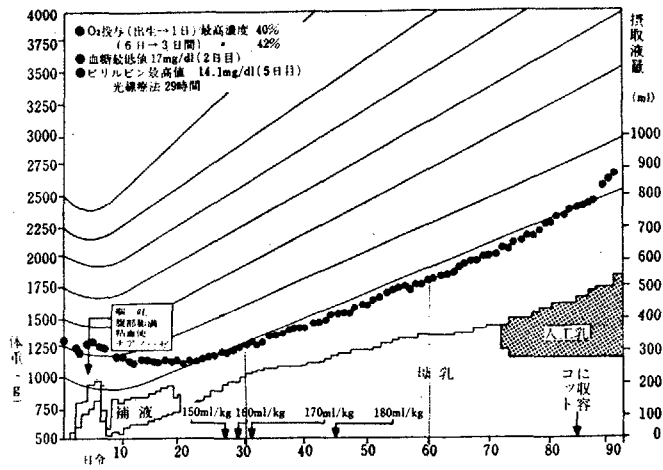
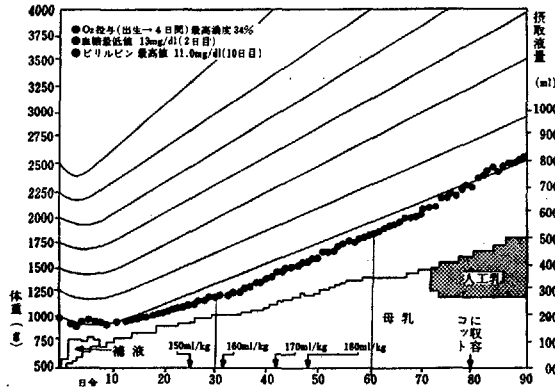


図7 5子(智子)



第1表 5胎出生時の諸計測値 (1976, 1, 31)

出生順	性	出生時間	胎位	APGAR Score (1m)	体重(g)	身長(cm)	頭圍(cm)	胸圍(cm)
I	♂	12:30	頭位	9	1480	43.0	31.3	24.0
II	♀	12:32	頭位	7	1800	45.0	31.5	25.0
III	♂	12:34	骨盤位	6	1130	41.0	30.0	21.2
IV	♀	12:37	骨盤位	9	1300	43.0	29.0	22.5
V	♀	12:39	骨盤位	9	990	36.0	26.9	20.0

結 語：

今回われわれは本邦で初めての5胎妊娠の分娩と哺育に成功したが、これには超音波断層撮影による早期診断と早期入院により十分な母子の管理が実施できたため38週まで妊娠を継続しえたことによるものが大きい。

今後長期にわたる専門家の医学管理ならびに精神身体的発達面の追跡調査などにより5子そろって心身とも健全に発育することを期待する。

五つ子の手部骨，膝部骨 X P の検討

研究協力者 諏訪 戒 三

骨の成長，成熟状態についてXPによる標値を行うことを目的として，次の如き研究を行った。

研究方法：

昭和52年1月25日(満1才)に，手根骨，前腕骨，膝部骨，下腿骨のXP撮影を行い，骨成熟度(骨年令)，骨の長さ，骨の太さを計測した。手部の骨成熟度はGreulich and Pyleの方法 (Radiographic Atlas of Skeletal Development of The Hand and Wrist, 2nd ed, 195G, Stanford University Press) により，膝部骨成熟度はPyle and Hoerrの方法 (A Radiographic Standard of Reference for The Growing Knee, 1969, CC Thomas,

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

研究目的:

一般に多胎妊娠は決してまれなものでなく、欧米では Hellin の法則に近い頻度を報告している。これによれば「五つ子」は 4.000 ~ 5.000 万回に一回の割合で生れると予測されている。

わが国における五つ子以上の出産例は過去 3 例であるが、いずれも流産している。今回、我々は鹿児島市立病院で生れた「五つ子」の全員が無事哺育されたので「五つ子」の妊娠・分娩経過と五つ子の哺育状況についての経験を報告する。